

「介護過程」授業研究

The Study of Teaching “Care Process”

根本 曜子¹ 古川 繁子²

介護福祉士養成課程が改正になり、「介護過程」という授業が150時間必修となる。2002（平成12）年の改正での各科目との統合性の視点等が不明確であるとの指摘を受け、今回、新しい科目として独立し、他の科目で学習した知識や技術を統合して介護過程を展開する能力を養う科目となった。本研究は介護過程の定義と旧カリキュラムでの本学の取り組みを振り返り、専攻科で実施された「介護過程Ⅱ」の授業を検証した。今回はDVDを使用、ロールプレイを行い、複数のアセスメントシートを使い、多面的に利用者理解をしていくことを目標にした授業を行った。この考察から、授業効果を測定する視点の必要性、利用者理解の視座の構築、各科目教員間のコンセンサスの必要性が今後の課題である。

キーワード：介護過程、新カリキュラム、ケアプラン、利用者理解

1. はじめに

介護福祉士養成課程は平成20年度のカリキュラム改正で現行1,650時間が平成21年度から1,800時間となった。新カリキュラムでは「介護過程」が150時間必修となる。「介護過程」という授業の取り組みを振り返り、今後の方向性を見出したいと考えた。

(1) 「介護課程」の新カリキュラムまでの流れ

1988年に介護福祉士の養成が始まり、2000年に介護福祉士養成課程のカリキュラム改正が行われた。このとき介護過程が「介護概論」（60時間）の中で、ケアプランの作成が「社会福祉援助技術」（講義30時間）（演習30時間）で学ぶことになった。このカリキュラム改正後、一番ヶ瀬（2000）は「介護福祉の各援助技術やその他の科目とを統合して、いかにその人の生活を高め自立を可能とするかを考える総合性への視点やそのチェックポイントなどは不明確のまま、バラバラの教材がおかれている。しかも今回の改正においては、各教科の内容があまりに細やかに指示されている。これでは、ますます総合性を失い、分化した知識と実践の間の乖離はより著しくなっていくであろう」と指摘した。

その乖離の状況について「社会福祉援助技術」を例としてあげると、片山（2009）は「社会福祉援助技術は社会福祉士養成科目として主に実施されてきた。そのような社会福祉援助技術を、社会福祉士とは援助方法が異なる介護福祉士に直接同じやり方で教授してもあまり意味がない。（中略）利用者の生活の単なる一場面である介助技術の展開場面を捉えた演習ではなく、生活そのものを支えていく新たな介護技術のとらえ方が必要であるといえないだろうか。その意味で、一つひとつの身体的介護行為を捉えた演習が行われるのではなく、家政学や社会福祉援助技術演習等を含めた『生活場面』あるいは『生活の展開状況』を捉えた演習の構成が必要になるのではないかと考える」といっている。また、上野（2005）は「介護福祉士教育において、社会福祉援助技術を指定カリキュラム通り講義30時間、演習30時間という限られた時間内で教えるのであれば、もっと介護福祉士の援助場面に引きつけて各々の技術を展開して見せなければ、学生は社会福祉援助技術を学ぶ意味や、どれが自分たちの仕事にとってどう役に立つかが見えてこないのではないのではないだろうか」といっている。

一方で、石野（2008）は「2007（平成19）年の『社会福祉士及び介護福祉士法』改正で介護福祉士の定義の見直しがあり、業務規定が『入浴・排せつ・食事その他の介護』から『心身の状況に応じた介護』に変更されたことに関連していると思われる。つまり、利用者の“心身の状況に応じる”ためには、アセスメントという判断業務が不可欠であるため、介護福祉士による介護過程の展開が必須の要件になったからであると考えられる。」と述べている。介護福祉士が経験や勘、偶然によらず、科学的根拠に基づき、客観的にアセスメントし、介護を実践する専門性を養う科目といえる。また、利用者の人格、生活全体を尊重し、意図的に計画的に介護を実践していくことをめざしていると考えられる。

このような状況の後、2009年4月の新しいカリキュラムで「介護過程」として独立し、150時間の主要な教育内容に位置づけられた。そのねらいは「他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切なサービスの提供が出来る能力を養う学習とする」と示している。

（2）介護過程の定義

「介護過程」とは何か。石野（2000）の前のカリキュラム改正時、介護過程とは「介護実践のための『問題解決過程』という思考方法の応用である。利用者の個別のニーズに合わせた援助を考える過程としての活用が意図されている。この問題解決過程そのものは、ごく日常的に私たちが生活の中で意識的あるいは無意識的に用いている『思考方法』である。」と述べている。「また、この問題解決過程の看護場面での積極的な応用が先に述べた『看護過程』であり、医師の行う『診断・治療過程』であり…」と、問題解決過程、介護過程、看護過程を並列し、作図で説明している。また、看護教育の中では30年近い歴史を持つ看護の実践論として位置づけられている。

そして、応用された「問題解決過程」とは何か。社会福祉援助技術のケースワークで著名なH.パールマンは「ソーシャルケースワーク・問題解決の過程」で、既に1957年に4つのPという表現で「Person（相談者）」「Problem（問題）」「Place（施設・機関）」「Process（過程）」をあげている。そのプロセスとは

利用者が生活する上でかかえる問題をより効果的に解決することを助けるため、ワーカーとクライアント間の援助関係を用いて繰り返される専門的援助過程である。そして、流れと要素は「開始→アセスメント→援助計画（プランニング）→計画の実施（活動）→評価→終結」山辺（2003）である。これは1917年、ケースワークの母と称されるメアリー・リッチモンドが全米社会事業会の講演で「ソーシャル・ワークは技法と技術をもっている」と主張したところから、理論化が進んだものである。そして今や、看護を初めとして、介護だけでなく、応用される範囲は広い。

2. 本学での推移

本学では「介護過程」を旧カリキュラム最後の平成20年度入学の学生に対して、主に3科目で取り上げた。まず、「介護概論」では2008（平成20年）1年後期に6時間。次に「実習指導演習」で2009（平成21年）2年前期に12時間授業を行っていた。ここでは「事例で学ぶケアプラン作成演習」黒澤貞夫編著の中から、事例を用いて、介護実習第Ⅲ段階で使用される介護過程の展開ワークシートを使い、介護過程の展開を異なる事例を使って、それぞれ1回介護過程の展開を行い、提出、添削後返却し、実習に臨んでいた。

3つめに「介護技術演習」で1年後期に12時間（年度によっては14時間の年もあったが）。これに関して以下のような報告がされている。（「介護過程演習の一考察」井口、布施（2002））。本学の介護技術演習の授業では1年後期で介護過程の学習を行っていた。報告当時12時間を使い、講義、演習、まとめを行った。内容は講義6時間で、対象者の理解について、介護過程について、事例の概要、記録用紙の作成し、それを元に介護計画を立案する課題を休暇中に行う。次に演習、まとめ6時間はグループに分かれ、各グループに教員がアドバイザーとして入る演習を4時間。グループの発表、意見交換、各教員の指導助言、まとめをし、自己評価をする事を2時間行っていた。

その授業内容の後、アンケートを用い、その集計結果の考察が行われている。「観察することにおいて対象を理解しようとする働きかけは単にチェック

リストによって画一的に分析されるものではないと考える。学生は今回の演習を通して、方法論ではなく対象を理解し、ニーズを引き出す方向づけとしての学習ができたといえる。今後事例学習では現場の介護福祉士等と連携をとりながら、生活障害を意識化できるようにすること、また、対象者の希望や見えない欲求に対しても意識化できるように教材研究を行う必要があることが示唆された。」とある。

今年になって、カリキュラム改正にともない、「介護過程」の授業はⅠ～Ⅳに分かれ、150時間行われることになった。その授業目標はⅠでは介護過程の意義、目的、展開方法について学び、介護過程の各段階及び介護過程の展開の必要性と方法を理解する。Ⅱでは様々な事例における介護過程の展開を行い、利用者に適した介護を考え、介護過程の各段階及び介護過程の展開の必要性と方法を理解する。Ⅲでは他職種の役割や機能を踏まえ、介護場面でのチームアプローチを学び、介護を実際にする際に、チームアプローチの重要性や方法を理解する。Ⅳで、実習の事例を振り返り、介護過程展開の意義や方法の理解を深め、介護過程展開の技術を習得し、利用者に適した介護を考える。Ⅲ、Ⅳは介護実習のすべてを終了した時点からの学習となる。講義、演習、時間配分は図－1の通り。

図－1 本学新カリキュラム「介護過程」の構成

科目	地域介護福祉専攻 2年養成	専攻科介護福祉専攻 1年養成
介護過程Ⅰ 30時間	1年後期 講義	前期 講義
介護過程Ⅱ 60時間	2年前期 演習	前期 演習
介護過程Ⅲ 30時間	2年前期 演習	後期 演習
介護過程Ⅳ 30時間	2年後期 演習	後期 演習

3. 研究対象授業

研究報告として、前回は旧カリキュラムの2年生の社会福祉援助技術の中のケアプラン作成の授業研究について報告した。また、昨夏、介護福祉教育学会で、この2年生と新カリキュラムの専攻科の授業の比較検討の報告をした。

今回の報告は専攻科の前期に行われた「介護過程Ⅱ」を振り返る。「介護過程Ⅰ」は講義で古川が担当し、「介護過程Ⅱ」は演習で古川、山田、根本が

分担して担当した。授業は4時間続きで、事例研究を行った。それぞれ古川が在宅の高齢者、根本が施設入所の高齢者、山田が自立生活希望の施設入所障害者の事例を用いた。根本の実施した授業は16時間の演習で4回にわたり、1つの事例をいくつかのケアプラン立ち上げシートで、分析、アセスメントすることによって、多面的に利用者理解をしていくことを目標とした授業を行った。井口(2002)でいわれた利用者の希望や見えない欲求に対しても意識化を踏まえて、介護実習後、介護過程について感想を書かせ分析、考察を行った。

(1) 内容

専攻科では介護過程ⅠとⅡを同時進行で行う。Ⅱでは居宅の事例、施設の事例、障害者の事例を用いて、介護課程を展開する。昨年の社会福祉援助技術の授業の考察を踏まえ、施設の事例は事例の教育力を用いて、昨年と同じN氏の事例を用いた。この事例は実習生の記録に基づく事例であり、専攻科の学生の記録であるので、更に学生達にとって、身近になると考えられた。受講者の人数は6名で3名ずつ2グループを作った。第1回目は専攻科学生の介護実習の経験がない点を考慮し、地域で暮らす障害者の生活の生活を描いたDVD「家族で暮らしてみたい－蓮尾さん一家の歩み」を用いて、ICFの社会参加と生活の阻害要素を支援によって支えていることを解説した。その後、昨年同様インシデントプロセス方式、情報収集をグループワークで学生それぞれが施設の職員に扮して、ロールプレイしながら行った。第2回目はフローチャート式ケアプランアセスメント表とセンター方式C-1-2私の姿と気持ちシート使い情報のアセスメントを行った。第3回はICFケアプラン立ち上げシートを使いアセスメントした。1回目2回目の授業で少人数のため、ロールプレイが活発に行われない点に気づき、N氏と施設職員となり、臥床するN氏を起こす声掛けのロールプレイを行った。第4回はこれらのアセスメントシート全部を用いて、ケアプランを作成し、事例の実際の実習生の展開を学んだ。

(2) 考察

毎回の授業の最後に学生に感想を書いてもらい、それを考察した。

1) DVDについて

①とつてもびっくりのビデオを見て、ICFの考え方がよくわかりました。自分が出来ないでしょうという見方でいることもよくわかりました。②人との関わり合い、地域で暮らしていくことの大切さや私たちが将来どんなことをしていけば、利用者の方のためになれるのか等を考えました。

とあるように、専攻科前期の学生には障害者の生活に対する理解がまだ不十分であるといえる。やはり、DVDの活用は有効であったといえる。

2) アセスメントについて

①情報収集が甘い。②紙に書いて写してみることでもまだまだ足りない部分に気づけた。③アセスメント表はいろいろ書くべきことがあったんだと気づきました。④情報を分析して考えることの難しさを感じた。⑤いろいろなことに気づいてご本人の身持ちに少しでも近づきたい。⑥アセスメントシートには様々なものがあるし、視野を広くいろいろな観点からその人は環境も知っていかなければならない。

これらから、既に保育士として指導案を書く経験があった学生達はケアプラン作成に対しては難しいとは感じていなかったが、情報を収集し、アセスメントしていくことははじめてで、そのため複数のアセスメントシートを使用したことは有効であったといえる。

3) ロールプレイについて

①N氏への対応の難しさを知りました。②相手をわかりあうことは頭を使う。③N氏になると介護側の気持ちもわかり、違うケアプランの視点になれそうになった。④会話や話がもっと上手になりたい。

これらから、介護実習の経験のない学生がケアプランを作成するときは双方の役を演じることは重要であるといえる。

4) 事例の教育力について

①人柄だけでなく、本当の気持ち、心の奥の気持ちをわかってあげられるようになりたいと思った。②N氏は山本さんと出会えて随分心が癒され理解してくれる人が出来た。③決めつけるのではなく、その人の本来の姿を知ろうという視点で実習に参加

できたらよいと思った。④実際にN氏と関わった山本さんはとてもすごいと思いました。

学生達は専攻科実習生山本さんとN氏との関係作りに惹かれ、山本さんのように実習したいと願っていることがわかる。これは旧カリキュラムの6時間の授業ではみられなかった深まりと考えられる。

(3) 実習後（介護過程展開後）の感想から

この専攻科学生たちに実習後、介護過程について感想をとった。ケアプラン作成の難しさ、限られた実習期間で実施することの難しさ、をあげる中で、「細かな気付きを頭で理解し、気付いたうえで次の目標や計画をたてていて、次の行動へつなげているけれど、実際に書面に移すこと、言葉にすることが難しかった」「日常の中の声かけ、そのことの反応も介護過程に入るのではないか？何を提供しようとしているかが、介護過程ですか？アセスメント→プラン作成・・・etcの流れはわかるが、通常の日々のことは？」という感想が出た。このことから、生活の中の記録は取れても、介護過程の要素として捉え、展開することが困難だったことがうかがえる。しかし、あえて展開させることで、自分の行動の言語化ができ、改めて、自分のしたことの根拠を人に伝えることができる。これがエビデンスに基づいた介護ではないだろうか。このことを今後の授業の企画に活かしていきたい。

4. 授業の課題

今回の授業でロールプレイにはICレコーダーを使用した。専攻科の授業を進めていく中で、少人数のケアプラン作成のグループワークでは発話が少なく、ロールプレイが活発でなかったことから、N氏と職員とのロールプレイを新たに取り入れた。この場合、会話を記録するだけでなく、そのやりとりの詳細を記録するためにも、VTRや写真で記録することが教育評価には必要であった。1年間を通しての授業効果を測定する視点をとその準備の時間が足りなかった点や撮影者などの協力を仰ぐことなどが今後の課題である。

今後の授業の中で、利用者を多面的に捉えるという視点を養うことは重要である。そのためには利用者理解にもっと焦点を絞った検証のしかたについ

て、また、何をもって利用者理解とするか、利用者理解の視座の構築が必要であると考えらる。

一方で、「介護過程」は厚生労働省のカリキュラムのねらいにあるように「他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切なサービスの提供が出来る能力を養う学習とする」ということから、同じ「介護過程」の授業を実施する教員だけでなく、他科目の教員間での各科目の進捗の理解、各段階の実習目標のコンセンサスが不可欠である。そのための定期的あるいは随時のミーティングが必要であることが明らかになった。2年課程の介護過程Ⅰ・Ⅱについては担当する4名の教員がミーティングをとりつつ、授業を進行させているが、他科目を担当する教員とも随時ミーティングをもつように企画したい。

【引用文献】

- 1) 一番ヶ瀬康子 (2000) 「介護福祉教育はいかにあるべきか」『新・介護福祉学とは何か』一番ヶ瀬康子監修 日本介護福祉学会 ミネルヴァ書房 P.231
- 2) 石野育子著 (2000) 『最新介護福祉全書 別巻2「介護過程」』メジカルフレンド社 P.2
- 3) 片山徹 (2009) 「介護福祉士教育における社会福祉援助技術の授業組み立て—「介護」に関連付けた演習の在り方に関する考察—」『介護福祉教育 第14巻 第2号』日本介護福祉教育学会 中央法規出版 P.41
- 4) 上原千寿子 (2005) 「介護福祉士養成における社会福祉援助技術の役割」を探る取り組み『介護福祉教育 第10巻 第2号』日本介護福祉教育学会 中央法規出版 P.14
- 5) 山辺朗子著 (2003) 『ワークブック社会福祉援助技術演習② 個人とのソーシャルワーク』ミネルヴァ書房 P.17

- 6) 井口ひとみ、布施千草 (2002) 介護過程演習の一考察 —学生の自己評価の分析から— 『介護福祉教育 第7巻 第2号』日本介護福祉教育学会 中央法規出版 P.21～26
- 7) 石野育子著 (2008) 『最新介護福祉全書7【介護】「介護過程」』メジカルフレンド社 P. i

【参考文献】

- 1) Richmond, Mary, E. 1922 "What is social case work? An industry description" Russell Sage Foundation (リッチモンド、1991『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』小松源助訳、中央法規出版)
- 2) Biestek, Felix P. 1957 "The casework relationship" Loyola University Press (バイステイク、1996『ケースワークの原則』尾崎新ほか訳、誠信書房)
- 3) Perlman, Helen H. 1957 "Social casework, a problem-solving process." (ヘレンH.パールマン1957『ソーシャルケースワーク・問題解決の過程』1966松本武子訳 全国社会福祉協議会)
- 4) 松木光子編著 (1995) 『ケーススタディ 看護過程 看護診断から評価まで』医学書院
- 5) Peplau, Hildegard E., 1952, "Interpersonal relations in nursing: A conceptual frame of reference for psychodynamic nursing," Putnam's Sons (ペプロウ、1973『人間関係の看護論』稲田八重子ほか訳、医学書院)
- 6) Wiedenbach, Emestine, 1964, "Clinical nursing: A helping art" Springer. (ウィーデンバック『臨床看護の本質：患者援助の技術』外口玉子ほか訳、現代社)
- 7) 小林富美栄ほか評 (1981) 『現代看護の探求者たち—その人と思想—』日本看護協会出版
- 8) 諏訪さゆり編著 (2008) 『「ICFの視点」に基づく施設居宅ケアプラン事例展開集』日経研出版
- 9) 介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2009) 『新・介護福祉士養成講座9「介護過程」』中央法規出版
- 10) 澤田信子・石井享子・鈴木知佐子編 (2009) 『介護福祉士養成テキストブック8「介護過程」』ミネルヴァ書房
- 11) 黒澤貞夫編著 (2001) 『事例で学ぶケアプラン作成演習』一橋出版